

ブレイブズ ～勇者と伝説の戦士～

サイレント・レイ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ガオガイガーとプリキュアの二次クロスと言う無謀とも思われても可笑しくない作品です。

尚、後日書き改めます。

目次

プロローグ クリスマスの出会い

プロローグ クリスマスの出会い

—— 七色ヶ丘 ——

日本のとある街・七色ヶ丘は数年来の大雪で白一色の雪景色のホワイトクリスマス夜の夜を迎えていた。

しかも今年は緑色彗星ことギャレオリア彗星の地球最接近もあつて例年より騒がれている此の時、此の街の郊外でとある青年が知人の少女を迎えようと探していたが、暫くして雪原で燥いでいるのを見付けた。

「なお——!!」

「…あ!! 凱兄ちゃん!」

雪の中を燥いでいた少女：緑川なおは自分を名を呼びながら近付いて来る青年・獅子王凱に気付いた。

「凱兄ちゃん、どうしたの?」

「命とおばさんが食事の用意が出来たそうだ。

れいかももうすぐ来るそうだよ」

「やった—!! もお〜お腹ペコペコだよ〜!」

幼馴染みが来る上に食事の準備が出来た事(と言うより大食らいのなお(言っておくが凱も人の事は言えない)の事だから、後者の方のみと思われているが…)に喜んでいるなおに凱は微笑みながら頭を撫でた。

此の凱の行為になおは頬を赤くしながら嬉しそうにしていた。

「…それじゃ、行くか」

「うん! だけど凱兄ちゃん、此の空じゃギャレオリア彗星は無理だね」

「はは…此ばかりはしかたがないよ」

宇宙飛行士になろうとしている凱にとってギャレオリア彗星の観測を望んでいたが此の雪雲に覆われた現状ではそれが不可能の為に苦笑した。

だがその直後…

「……ん？」

「どうしたの凱兄ちゃん？」

…不意に何かの爆音が聞こえ、しかも徐々に大きくなっている……詰まり此所に近付いて来ているのに凱が気付いた。

そして辺りを見渡した凱はは頭上から来ている爆音の主を見付け

：

「なお、下がっている！」

…凱がなおを背後に隠すとほぼ同時に爆音の主は二人の前に降り積もった雪を派手に巻き上げて着地した。

「……っ！ 何?！」

「…白い……ライオン?！」

その着地点から舞い上がった雪が晴れ始め……二つの緑色の光が見え……それ等が目であると分かった時、雪が完全に晴れて降りてきたのが白をメインとしたライオン形の巨大ロボットが唸り声を上げて立っていた。

だがそのロボットライオンは警戒している凱となおに歩みよつて来て、二人の前で静かに伏せた。

此のロボットライオンの行為に凱となおが思わず目線を合わせた。突然ロボットライオンが口を大きく開け……そこに五角形の緑色の宝石が二つ存在していた。

「……っ！ なお!!！」

背後のなおが飛び出てロボットライオンに駆け寄った事に凱が驚いていたが、当の本人はロボットライオンを信用したのか、ロボットライオンの目を見つめていた。

最も凱もロボットライオンに警戒心を殆ど解いていた。

「…此の二つを私にくれるの?！」

なおの問い掛けにロボットライオンは何も反応しなかったが、何かを察したなおは口の中に入って宝石を二つ取り出して凱の所に戻つて来た。

そして凱がなおを背後に隠した直後、ロボットライオンは立ち上がって凱となおに別れを告げるみたいに吠えた後、腰のジェットを吹

して何処かへ飛さって行った…

「…凱兄ちゃん、あのライオン何だったのかな？」

「さあな。ライオンがサンタクロースの代わりに勤める何て話なんか聞いた事ないしな…」

凱となおはライオンロボットの事でお互いの目線を合わせて暫く首を傾げていたが、なおが胸に抱えている宝石…命の宝石・Gストーンの一つが二人に気付かれず静かに点滅していた。

そして深い関係を持つ事になる凱となおの後にギャレオンと命名されるロボットライオンとの初めての出会いであった。

それは獅子王凱15歳、緑川なお5歳の時であった。

だが凱となおは自分達の宿命とギャレオンにGストーンを託された少女達が他にもいる事をまだ知らない…